

# T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## 古田武彦氏 新春講演会

# 日本の禁書と 歴史学の未来

古田武彦氏の新春講演会は、一月十五日午後一時より、東京都勤労福祉会館大ホールで、本会主催により行われました。以下にその要旨をご報告します。

古田 あけましておめでとうございませう。新年を迎えて、今年も新しい研究の進展がありそうな予感を、いま抱いているところでございます。本日のテーマは、第一に「禁書」の問題です。後半では、最近の新しい発見について、時間の限り話させていただきます。

### 中国禁書大観

三年前に中国に行きました。本日もここにも会長の高田さんをはじめ、ご一緒に行った方もおられます。その目的は、西域に西王母の故地を確かめることでしたが、帰途に北京の本屋さんで、「中国禁書大観」というかなり大部の本を買いました。秦朝から清朝に至るまでの、中国歴代王朝の「禁書」政策および事件の、詳しい報告と、各禁書目録を添えた本で

す。天安門事件のあとに、上海の文化出版社から発行されたものです。昨年九月に、日本でもその抄訳が新潮選書「中国の禁書」として出版されました。この抄訳本の方の良いところは、原書では記述が清朝で終わっているのに対して、その後も現代まで、「禁書」の政策がなくなったわけではないことを、訳者があとがきの形で述べておられる点です。原著が清朝以後のことを書かなかったのは、史料がないからではなくて、書くと出版に差し障りがあるからでしょう。

ところが、私の目から見ると、両書に共に欠落している面がある。四書五経（儒教の経典）成立以前の中国に禁書はなかったのか。ご承知のように、四書五経以後の中国の文明は、黄河中流域の中原の文明を絶対の基本としています。いわゆる中華

思想です。するとそれ以前に中国に文明はなかったのか。とんでもない、私たちが訪れた青海省方面の奥地には、玉の文明を誇る西王母の国がありました。周の第五代穆天子は、はるばると西域に西王母を訪ね、贈り物を献じ、天子に任命された、と「穆天子伝」に記されています。穆天子伝とは、「三国志」を書いた陳寿と同時代の晋代に、偶然周王の墓の中から掘り出された竹簡に書かれていた、穆天子の伝記です。ところが、黄河流域文明の学者である孔子や、その後、漢の時代に「史記」を著わした司馬遷も、このような内容は氣に入りませんでした。いやしくも周の天子が、西域の野蛮国の王の下風に立つなどとは、あり得ることではない……これは単なるお話として扱った。歴史事実とは見なかつたわけです。

しかし、西域地方は今でも有名な玉石の産地です。西王母の国は、その美しい玉を象徴とする文化圏であった。中国では古来、天子の印は玉璽です。配下には、金印や銅印を与えますが、自分自身の印はあくまで玉。この伝統はどこから生じたのでしょうか。それどころか、古くは玉の字に点はなかつた、玉はすなわち王を意味した。今、中学生も使う漢字

の辞書をご覧ください、玉、王のつく字はすべて高貴な字です。文字文明の生まれるとき、玉は最高の価値あるものとされた。その玉の中心的な産地が、西域西王母の国であったのです。その文明を受け継いだのが、中原の文明であったのです。

同様なことが、揚子江流域についても言えます。その一例が、江南の河姆渡遺跡。私も行きました。五、六千年前の大規模な稲作の跡、土器、缺状耳飾りなどの出土で知られています。夏の初代王禹は、その江南の会稽山に諸候を集めて、天下統治の盛儀を行った、とされています。なぜに江南か。そこがそれまでの文明の一大中心地であったからです。この江南の文明を象徴する貴重な物は貝ではなかったかと、私は考えます。また辞書を開いてみましょう。たとえば財産の財、寶物の寶、みな貝がついていますね。貝のつく字は貴重価値観を表わしています。文字の誕生に、貝文明の地江南の価値観が

反映しているのです。皮肉にも、一冊の小さな辞書が、司馬遷の史記よりももっと雄弁に、中国の歴史の真実を語っているのではないのでしょうか。

孔子も司馬遷も、西域や江南の先進文明について、何ら語るところがない……何故か。その歴史を語る書き物（ないし伝承）は、すべて消されてしまったからです。「禁書」。黄河流域に先立つ文明の記録は消されてしまったのです。

今中国を訪れると、資料館でも図書館でも、四書五経以来の中華文明の思想によって統一されています。私と話をした青海大学の学者の方々にしても、何か北京や中原に対して肩身を狭くしておられるような気配を感じました。漢の武帝のとき、董仲舒によって儒教が国教とされて以来、国教に背く書物は軽視され、または禁止され、老子の伝記など正体不明のものとなってしまいました。そのような禁書政策が、中国の誤れ

る中華思想の結果となっています。そのことには「中国禁書大観」も抄訳「中国の禁書」も触れるところはありますが、中国の禁書については、まだまだお話ししたいことがたくさんありますが、あまり面白がっていないときりがありますから（笑）急いで日本のごことに引き返します。

## 出雲・九州の禁書

昨年鳥取県の伯耆大山に参りました。志賀直哉の「暗夜行路」で有名な山です。ひそかに、大山津見神の源郷はここか、と調べに行ったのです。大山の津（港）み（神）と解釈してです。このことは結論が出ませんでした。副産物がありました。

大山中腹の大神山神社の重要な祭りを「もひとり神事」と申します。宮司さんによれば、大山頂上の池の水を運んで神に捧げる行事とのことでした。しかし、水とりと、もひとり。どうもピンときません。

長い間考えているうちに、気がつきました。出雲国風土記の有名な「国引き神話」。私はそれを縄文時代の神話と論証しましたが、「よみがえる卑弥呼」朝日文庫、その中では大山のことを火神岳と呼んでいます。主要写本は全部そうです。大神山神

社と名が変わったのは後年のことです。地元で出版された本によると、大山は一万数千年前までは活火山であったようです。その活動は、一斉にびたりと止まったものでしょうか。その余燼なり残影なりが、縄文時代まで残り、火神岳と呼ばれたのではないか。いたずらに、火の神の名が生じたはずはありません。故に、本来の祭りは、余燼の中から神聖な火種をとって運ぶ行事ではなかったのでしょうか。

「ご祭神は？」と問うと、これは即座に、明快に、「大国主命」と答えがありました。だが大国主命は弥生時代に始まる神です。それ以前の神は、何だったのでしょうか、どうなったのでしょうか。大国主命がこの地方を支配下においてから神様が入れ替わった。古い神々は、あるいは、因幡の白兔の伝説にある八十神、白兔ににせの傷薬を与えて苦しめたじわるな神々の姿に変えられて、大国主命のイメージアップに役立てられているのかもしれない。

ともあれ、ここでは縄文の古い神は消されて、弥生の新しい英雄の神に置きかえられています。その新しい英雄、大国主命もまた、国譲りによって、子孫断絶、ただ古事記に見るような、古いお話しの世界に閉じ

# 中国禁書大観



●第一部 总括 历史 禁书 沿革  
●提供迄今整理 未完 资料  
●首次 进行 系统的 理论 探讨  
●副 编 文 史 哲 语 学 领域 代表 著作  
上海文化出版社

「中国禁書大観」の背文字 安平秋・章培恒主編

込められてしまいました。言うまでもなく、新しく権力を握った九州王朝としては、先行する大國主命の國の繁栄や栄光を、華々しく語られるのを欲しなかったでしょう。その事蹟は凍結され、地下に眠らされた。それが、七世紀末、九州王朝の衰亡とともに、息を吹き返して、出雲から新しい政權のもと古事記の中にもたらされた……。ここに九州王朝による禁書の姿が、浮かび上がってきます。

### 伝わらない帝王本紀

次に、いよいよ日本書紀を見ましょう。神代紀の中には、十指に余る「一書」が登場します。一書、という本の名があるはずはありません。当然題名があつたはずですが、その名前は書かれていません。また、一書として登場するのは神代紀だけです。ではこれらの書には神代以後のことは書かれていなかったのでしょうか。そんな歴史書などありません。

ほかに、帝王本紀、日本旧記、日本世紀などの本の名が見えます。書紀の編者は、当然それらの本を目前に見ているのです。それらが、どうして大和政權の書庫に保存されなかったのでしょうか。なにかなく、

帝王本紀。これは代々の王の事蹟を記した本です。そんな王朝にとつて、大切の中でも大切な本を、どうして保存しておかなかつたか。問いを發すれば答えは自ずから明らかです。自分たちの王朝の歴史ではなかつたから……、保存しておいて世に知られては困る本であつたから。これが正直な答えでしょう。これらの本は、日本書紀編者によつて都合よく取捨選択されたあととは、取えて廃棄されたでしょう。

同じ大和政權のもとで作られた古事記でさえ、公式には歓迎されませんでした。克明な記録で知られる続日本紀に古事記が撰上されたはずの元明天皇の代の記録を見ても、古事記に関する記載は一切ありません。日本書紀が正史となつた後は、これと食い違う古事記の内容、系図等は、公式に認証してはならないものだったので。だから、ひそかに地下に伝えられ、鎌倉時代になって初めて日の目を見るに至つたことは、皆さんご承知の通りです。【新撰姓氏録】という本があります。大和政權下の各氏族の系譜です。何が、新撰でしょうか。旧来の氏族の系譜を、大和政權のイデオロギーに合うように、新しく編成し直した系譜です。だから、当然旧撰の系譜は伝わっていま

せん。伝えられてはならないものであつたからです。八世紀以来の大和政權の歴史を見れば、このように「禁書」だらけと申せましょう。

### 他言無用、門外不出

話を現代に移します。和田家文書。二十余年前に、市浦村史資料編として公表されて以来、得体の知れぬ奇書と目されている間は、問題にならなかつた。それを私が「真実の東北王朝」で、真剣に研究すべき歴史史料として注目し始めて以来、にわか反撃する人が現われました。古事記、日本書紀、各風土記などの史料があれば足りると考えている人たちにとつては、「東日流外三郡誌」など必要ない、むしろじやまな史料なのでしょう。この問題については、別の機会にも述べましたので、ここでは重点だけを簡単に申ししましょう。一群の人たちは、和田家文書を和田喜八郎氏の手になる偽作として攻撃しています。その証拠の一つに、新しい考古学事実が出現する度に、対応する文書が追つかけて、和田家から発表される、と言います。だが、今回の三内丸山遺跡をごらん下さい。二十メートルを超える柱跡が発見されました。考古学者も驚いています。

しかし、すでに東日流外三郡誌には三内の地に「雲抜ける如き、石神の殿ありき」と、書かれていました。これを貴重な文献史料と言わずして、何でしょうか。

その他、進化論、適者生存、宇宙大爆発などの理論が、一般科学史の通念に反して、寛政年間の長崎での聞き書きとして、記述されてきたことも偽作の証拠とされてきました。しかるに昨年、英国の信頼ある学者の著としてチャールズ・ダーウインの祖父、エラズムス・ダーウインの伝記が発表されました。それによると、すでにその祖父の段階（寛政以前）でヨーロッパではそれらの理論の原型が論議されていたことが明らかにになりました。一般の科学史の認識が、まだそこまで及んでいなかっただけのことなのです。

次に、「国史画帖大和桜」。疑う人は昭和十年に、皇国史観宣伝のために出版されたその画帖の絵と、秋田孝季の著作とされる歴史絵巻とに、共通する絵柄が多数あることから、これこそ昭和十年以後の偽作の動かぬ証拠、と言いはやしました。影響を受けた人も多いようです。が、国史画帖を手に入れて調べましたら、その序文には「絵は古今の名画より取り……」と、古い絵の複製である

ことを自ら宣言してありました。これなら共通の絵柄があっても不思議はありません。しかるに、偽作論者はこの序文の事実をひたかくしにしたまま性急に論難に走ったのです。

もう偽作論者は、これらの点にまともにも反論する余地はありません。奥の手を使って、今はこの古田自身を偽作者に仕立てようと躍起です。(笑) しかし、もう結果は明らかです。この問題の終幕の訪れる日を、皆さんは今年中に目のあたりにされることになりました。

ついでに、和田家文書について付け加えます。その内容は、明治国家の基本構造をゆるがすものを含んでいます。たとえば、『北斗抄』巻十二(未公開)の一部を引用してみましよう。最初に「愚かなり、廃仏棄釈……」とあります。以下意識で「大和政権の神を至高として各地方の神仏の信仰を弾圧するとは、江戸幕府でもやらなかったことを明治政府がやっている。神道以外の学問を排斥し、神に対しても、村社とか、郷社とか、差別的な格付けをしている。神仏に何の咎があるか。このような政治を行っているのは、いずれ国に反乱が起こり、国家は滅亡に至るであろう……」そして終りには「明治十五年兇月兇日自由民権葬らる」とありま

す。これは和田末吉自身の文章です。このような文書が、明治の世に公表できるとは思えません。故に、和田家文書には随所に、「これを公表すると世の迫害を招くから、時機の至るまで必ず門外不出、他言無用とせよ」と繰り返し念を押してあるのです。江戸く明治の禁書です。

### 権力は永遠を願う

以上の考察から、私は昨年末、禁書のグラフを作ってみました。古田クラブ……(笑) 縦軸はTで時間軸。中国で見ると、夏殷周以前から、現代にまで及びます。日本でも縄文、弥生時代も入ります。一方横軸はS、スペースで空間軸です。出雲、九州、大和など、あらゆる権力の所在地がマークされます。海外では、バイブル、コーランの世界にも及ぶでしょう。あらゆる権力は、自己の権力を永遠のものとしようとす願望を持ちます。面白いことに、中国では、天文、占いの書も禁書になります(これに倣った大和政権の律令もまた)。権力は永遠を欲しますが、天文、占いはそれを相対化します。たとえば、乾の方角に彗星が現われるのは、天下大乱の兆し……などと。だから、天文、占いの書も禁書になるのです。

しかし、一つの固定された権力が、永遠であろうとする願望は、古今の歴史に徴すれば、しよせんは虚しい願いというほかはないのであります。(十分休憩)

### 海洋民族征服説

(以下後半の内容は、スペースの関係で要点を略記します。)

一昨年は神津島に行き、この正月は八丈島を訪れまして、今伊豆神学ということを考えているわけですが、八丈島でも中心の神社が優婆夷宝明神社と申しまして祭神は八十八重姫です。八百万の神より素朴な形で、しかも女神ということ、縄文の神を伝えていると思います。丹那婆伝説という説話もあります。これは昔、大津波で妊娠している女性がただ一人生き残った。生まれたのが男の子で、その母子の間に次々と生まれた子供が島民の祖先である、という説話です。ギリシャでも、ソホクレスの母子相婚のテーマが悲劇としてあります。八丈島は悲劇ではない。むしろ佳い話です。今でも、丹那婆の記念碑、お墓もあります。後世的な道徳観念発達以前の素朴な形を伝えていきます。

島の立派な歴史資料館があります

て、興味ある縄文遺跡の姿がうかがえますが、中でも私が注目したのは、高床式住居です。八丈島と同じ様式のもの、沖繩にあり、南方諸島に見られる様子が写真で比較してありました。それを見て私は最近注目している「江戸時代パラウ漂流記」(11ページ参照)を連想しました。これは文政年間に岩手の漁民が、漂流してパラウ諸島に流れ着き、運よく長崎まで帰ったとき、役人が聞き書きしたものが資料になっています。それによりますと、島の風俗が、とてもよく魏志倭人伝の倭人の風俗に似ている。刺青をして、それが島により、身分により様式が異っている。身体に朱を塗る習慣がある。もちろん、高床住居ですが魏志の倭国も吉武高木、吉野ケ里をはじめ高床住居です。文献でも、神武天皇が泊めてもらった「足ひとつ上りの宮」、あれは川の上に立てかけた高床住居と言われています。

面白いことに、パラウでは、女子が成人すると、アルメンゴルという共同の成人宿に入って売春をする。母親も娘が嫁いでくれることを自慢にするといえます。何だか吉原の遊廓のようですね。世話をする男衆が一人いて、代金の取り立てなどもする。ほら、卑弥呼にも男弟のほかの

一人の男が、身の廻りの世話をし、言葉伝える。何だか似ていますね。もつと似ているのは、一年を西風の季節と東風の季節と、二つに分けて、それぞれ一年としています。私は『魏略』の注記から倭人の二倍年歴という仮説を提起しましたが、もしかしらその風俗の起源が、これら南方諸島にあるかもしれない。

ついでに申しますと、魏志倭人伝の記述の目的は、卑弥呼の女王国で終点と、私も(他の誰も)考えていましたが、間違いでした。中国の関心からすれば、さらにその東はどうなっているか、それも重大な課題であったはずです。だから、侏儒国まで四千里、裸国黒齒国まで船行一年(実は半年)と、距離が書かれているのです。どうもわれわれ日本人の身勝手、この点を見逃していました。

最後に、時間がありませんので、ほんのヒントだけを、これからの研究のために申し上げておきます。さきほどの様々な南方風俗の在り方から、南方民族が日本に渡来した、しかも上層階級、支配階級として渡来したような形跡があります。これを『海洋民族征服説』と称しまして、今後の研究の課題したいと思います。(拍手)



学問は真実の大道である。真実を目指し、真実に達する。誰にもそれ以外の目標はなく、それ以外の方法もまた一切存在しないのである。

わたしがかつて『邪馬台国』に非ず、『邪馬台国』の立場をとり、それが九州の博多湾岸とその周辺にありとしたのも、史料事実と論理を重んずる、その立場に一貫して固執したからであつた。近年、博

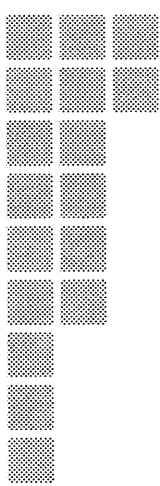
多湾岸(吉武高木、雀居)とその周辺(吉野ケ里、平塚川添等)に累出する、

弥生の宮殿跡群の存在は、わたしの学問の方法が虚でなかつた事実を明瞭にしめしている。同じくわたしは「東北王朝」の語を以て、東北地方北辺に一大先進文明の存在したことを暗示した。果然、昨年の三内丸山遺跡(青森市)の高層木造建築物等の出土は、わたしの指摘が虚でなかつた事実を明示したのである。その上、「雲を抜ける如き石神殿」(東日流外三郡誌)の一節が、そ

# 学問の大道

の伝承であり、その文献的な反映であることをいち早くわたしが指摘しつづけたにもかかわらず、諸報道機関は一斉にこれを無視し、報道拒否ないし報道回避を行った。日本の未

来の民主主義社会にとつて、日常生活の「乗車拒否」の類とは比較にもならぬ危険事態である。そののみか、反和田家文書の過激派とも言うべき一派は、「季刊邪馬



台国」(55号等)によつて反撃を強

めた。それも和田喜八郎氏やわたしに対する個人攻撃と人格中傷であつた。かつて戦前、津田左右吉に対して養田胸喜等、「原理日本」一派が展開した卑劣な手口と同じく、全く非学問的な攻撃が核心となつてい

る。しかも偽書類(念書)や偽証人を仕立て上げ、それを「証拠」として

## 古田武彦

今年以降、その醜悪な手口の一

切が明らかになるにつれ、彼等とその同調者の比類なき悪名もまた、未来の歴史の中にしっかりと記録されることとなるであろう。右、天と地と学問の神の面前で誓言する。

一九九五年一月十五日  
(以上、講演会の場で配布された古田氏の声明文です。)



## 『邪馬台国』はなかつた

## が世に出た頃

編集者米田保氏の夫人、米田英子氏に聴く

古田武彦氏の古代史第一書『邪馬台国』はなかつた」が出版されて、歴史学界に衝撃を与えたのは、昭和四十六年、今から二十三年前のことです。古田氏自身の業績とともに、この本を企画して世に送った編集者、米田保氏（大阪朝日新聞社図書出版部）の功績は、忘れることはできません。氏は、昭和五十七年、六十八才で惜しくも死去されましたが、幸い夫人の英子さんがお元気で、とくに、今回お願いして、当時のお話を聞くことができました。

「これはたいへんな記事だ。ぜひ原稿をお願いしたい。」  
と、さっそく京都に古田先生をお訪ねしたところ、まだ読売新聞社からは、何の話もないとお話でしたので、さっそく原稿をお願いしてきたと話しておりました。



米田 保氏

「もともと夫は、社会部の記者をしておりましたが、身体が弱いほうで、昭和三十年代に六年間も休職しました。復職してからは、無理がないようにと朝日新聞社にも心配していただき、図書出版の仕事についていました。それでも記者魂というのでしょうか、すでに有名になられた先生方をお願いして本を書いていただくより、自分で、ニュースの中から将来性ある筆者を探して、本を造る……、そういう行き方を目標とされていたようです。公害病と

取り組まれた萩野昇医師の「イタイイタイ病との闘い」、ネパールで結核の治療に献身された岩村昇氏の奥様、岩村史子さんの「わが愛はヒマラヤの子に」などが、その仕事の例でございます。新聞で古田先生の記事を見て、すぐピンときたと申しますのも、夫のかねてからの念願にかなうものを感じたからでしょう。私が申すのも恐縮ですが、そういう直感と決断は、とてもすぐれた人でございました。

「執筆をお願いしてからは、とても順調で、とくに苦勞した様子はないがえませんでした。本ができますと、すぐ追っかけ、再版、三版と、たいへんなセンセーションでした。夫も張り切って、

「この本から、日本の歴史が変わってくるよ。天照中心の歴史ではなくなるんだ。」

と、口ぐせのように申していました。古田先生がお見えになると、何時間でも書斎にこもりつきりで、お食事の時間も忘れて話に熱中しているのがいつものことでした。東大の榎先生から反論が新聞に出ましたときも、さっそくお電話で、「先生、必ず反論してください。このままではいけません、何回でも反論はなさってください。」と、熱をこめて申していました。そんな様子を私は脇から見ていまして、著者と編集者というより、なんだか兄弟のよ

うな信頼の関係を感じたことでございます……

「夫はいつも申していました。『私の仕事は朝日新聞社の仕事としてやっているのだから、個人としての仕事ではない。だから、どの著者にも、私個人の名前は出さないでください、とお願いしている。』そのとおり、どの本にも、『邪馬台国』はなかつた」にも、主人の名前はどこにも出ていないはずですよ。その後、「古田さんは、たったひとり、全学界を相手に頑張っておられる。そこが、何よりお偉い。」と申しておりました。

私ごとを申して恐縮ですが、主人は、私がお家の中で、お茶ひとつ運んであげても、きまつて「ありがとう」と、ごく自然に言う人でした。この人生で、ありがとう、その一言の重いひびきを私に教えてくれた人、と思っております。

なお、米田夫人は現在西宮市にお住まいで、今回の地震で、お身体は無事で、元気にしておられますが家屋に半壊の被害を受けられました。謹んでお見舞い申し上げます。

〒994-11-5 東京都吉祥寺市のホテルロビーにて 文／編集部



# 安藤昌益 のこと

天地は一体にして  
上無く下無く



木村由紀雄

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という言葉（同趣旨の言葉）が「東日流外三郡誌」に繰り返し登場すると知って驚かない人はあるまい。うさんくささを感じても当然かもしれない。あまりにもラディカル、あまりにも奇矯であるからだ。ここで直ちに思い起こされるのは同じ東北の片隅で時代に抜き出た思想を展開した安藤昌益のことである。彼は十八世紀半ば、八戸を中心に活動したことが、今日では明らかになっている。

しかし、二十世紀始めに碩学狩野亨吉博士が発掘するまでは全く忘れられた存在であった。昌益の名前が一般に知られるようになったのはカナダの歴史家・外交官ノーマンが、第二次世界大戦後に出版した岩波新書「忘れられた思想家」がキッカケであったといえよう。明治維新の研究で有名なノーマンは封建制度を否

定した日本人はいなかったのか、とたずね人を探すように探し回り、昌益を発見したのである。もちろん、ノーマンが発見できたのは狩野博士の研究があったからである。

一八九九年、当時第一高等学校の校長であった狩野博士は稿本「自然真営道」を古本屋から購入した。これが昌益発見の発端である。狩野博士は稿本を研究してその思想に「驚、一九〇八年には「大思想家あり」という匿名の談話を発表して昌益の存在を初めて公表した。こうした発表形式をとったのは、昌益の思想が過激であるため、無用な誤解を避けようとしたからだといわれている。

その後の昌益研究もドラマティックである。「自然真営道」は東大に売却され、狩野博士の手元から離れた。その直後に関東大震災による火災で焼失してしまった。ところが、一部は東大の三上教授に貸し出されていて無事で、現在も東大図書館にある。狩野博士はその後昌益の著作を古本屋を通して渉猟し、刊本「自然真営道」、「統道真伝」（「自然真営道」の要約本、現在岩波文庫にあり）などを発見した。研究成果として、一九二八年に岩波講座「世界思潮」に「安藤昌益」を発表した。

これは狩野博士が公表した唯一の

昌益論で、現在は「狩野亨吉遺文集」に収録されている。「万物悉く相対的に成立する事実を根本の理由とし、苟くも絶対性を帯びたる独尊不易の教法及び政法は皆これを否定し、よってこれらの法に由る現在の世の中即ち法世を、自然の道に由る世の中即ち自然世に向かわしむるため、その中間道程として民族的農本組織を建設し、この組織を万国に普及せしむることに由って、全人類社会の改造を達成せしめよう」としたのが昌益であった。博士は初め昌益は狂人ではなかったかと問い、研究の結果そうではないと結論づけたとしている。

戦前では狩野博士の弟子とされる渡辺大涛氏の「安藤昌益と自然真営道」のほか唯物論哲学者の研究、また政治学者丸山真男氏の論文などを数えるのみであったが、戦後になるとノーマンを皮切りに一挙に研究が花開くことになった。反封建主義者、民主主義者、唯物論者、共産主義者、農本主義者、昌益の様々な側面に光を当てた研究が登場した。現在は農山漁村文化協会から安藤昌益全集全二十一巻、別巻一が完結、刊行されている。九二年には八戸市で記念シンポジウムも開催されている。東北の風土から生まれた自然と人の共生

の思想といった受け止め方が多いように感じられる。

学生時代、政治思想史に関心を持っていた筆者にとつて昌益はなつかしい名前である。ノーマンの本に続いて一世を風靡した丸山真男氏の「日本政治思想史研究」によって昌益は親しい存在となった。丸山氏の著作は戦前の研究を戦後にまとめたものだが、昌益は徳川思想史の中で、荻生徂徠によって切り開かれた「作為」の論理を継承発展させた思想家として宣長と並んで位置づけられている。両者の存在感、影響力からいえば昌益は破格の扱いといえよう。

こうした昌益も「架空の人物」視されたこともあった。しかし、次々と関係する証拠が発見され、今ではその存在を疑う人は誰もいない。安藤昌益の教えるものは、その思想内容にとどまらず、人物、略歴などについて、軽々な断定をしないことである。丸山氏によると、昌益はしばしば長崎に行つてオランダ人に接しており、「天地は一体にして上無く下無く統べて互性なるべし」と述べている。互性とは事物の間に存在する相関的性質のことである。「天は人の上に……」と通じるものがあると感じるのは筆者だけであろうか。



